

3-5. 粟島観光協会（新潟県粟島浦村）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】 363 人、高齢化率約 45%（平成 28 年 2 月 1 日現在）

【面積】 9.66 k m²

【地勢】

粟島は、新潟県村上市の岩船港から約 35 km 離れ、佐渡の北東上の日本海上に位置する、周囲約 23km、東西 4.4 km、南北 6.1 km、面積 9.78 km²の離島である。最高標高は島の中央に位置する小柴山の 265.3 m であり、山を挟んで西海岸には釜谷集落、東海岸には内浦集落と 2 つの集落がある。

【気候、自然】

日本海植物区に属し、日本海側、北方系、南方系、の植物が分布しており、粟島を北限、南限をする植物もある。作物についても北方系、南方系の両者の作物が栽培可能な環境にある。島嶼としては稀であるが、粟島では湧水が豊富であり、そのことによって島内の資源のみで生活が成立していたともいえる。山林は開拓され樹木の多くは畑や竹林の周りに防風林として植えられたものである。現在は行われなくなったが、かつては竹林業が盛んであり、竹を島外に輸出もしていた。現在は竹林が手入れされずに荒れた状態となっている。陸上資源とともに、海洋資源にも恵まれ漁業が基幹産業を担ってきた。水産資源の豊かさは現在の観光も支え、釣りや食事を目的に来るリピーターも多くいる。また、通常は無人島にしか営巣を行わないオオミズナギドリの営巣地でもある。

【歴史】

明治期の 3 度の大火により粟島の歴史を語る、文書・文献・資料等が失われたため、言葉や姓氏、地名、民俗、伝承等から下記のような推論がたてられている。

粟島では、弥生から古墳文化が確認されておらず、和人が入るまでの長い間、蝦夷の地とされていたと考えられている。地名にもアイヌ語に由来するものが確認される。8 世紀後半から 9 世紀頃には、対馬海流を利用して北部九州の民（マツラ（松浦）の一党、現在の釜谷集落の祖先）が北上し粟島に上陸（現在の内浦地区）し、先住のエミシ人を現在の釜谷地区に追いやったとされている。次に、その半世紀後の 848 年（嘉祥元年）前後には、越前沿岸から越前国本保信高を祖とするホンボ（本保）一族が漂着し、マツラ一族を西海岸（現在の釜谷地区）に追いやった。その影響で西海岸に暮らしていたエミシびと（アイヌ民族と考えられる）は島から出ざるを得ず北方へと追われたとされている。こうして現在にも至る集落構成が形成された。

その後、鎌倉時代、室町時代には色部氏の領地であった。この時期に板碑が大量に造られた。江戸時代には、村上藩や庄内藩領、幕府領と二転三転した。幕末期には、北前船の重要な避難港として位置づけられ、北前船を介した文化の交流もあったと考えられる。

時代を経て、1964 年に新潟地震が発生。地震によって全島が 1m 程隆起し、その影響で稲作が不可能となり、以降は畑作が島民の生活を支えてきた。この出来事により世間から粟島が注目を浴びることとなり、当時の離島ブームと相まって粟島の観光が開かれるようになる。地震後の家の建て替えを契機として民宿業を始める島民が多く、現在でも多くの島民が民宿業を営む。

【漁業】

一年を通じて豊かな海洋資源に恵まれている粟島では漁業が人々の生活を支えてきた。観光産業が盛んになった後も水産資源によって観光産業を支える重要な存在でもある。タイ類や、ブリやノドグロ等の北陸を代表する魚種から、タラ等の北方系の魚種、タコ、更にワカメやエゴノリ、モズク、天草、ウミソーメン等の海草類、アワビ、サザエ等の貝類と、多種多様な資源に恵まれる。特に、鯛漁を主目的とした春時期の大謀網漁は明治期から粟島の漁業を支えており、「鯛の島・粟島」との名もある。漁法は主に定置網漁、底引き網漁、大望網漁である。しかし、現在は漁業の後継者不足が問題となっており、漁の主な目的が民宿への食材提供となっている場合も多い。現役の底引き船も1隻のみとなっている。一方で、大謀網漁や磯ダコ釣り等は、体験型観光としても活用されている。

【農業】

粟島の農業は、各家で野菜類を栽培する自給目的のものである。小豆・大豆も自給しており、あんこや味噌もみな自前のもを使用している。稲作も、以前は行われていたが、1964年の新潟地震による島の隆起が原因で水源が枯れた為、それ以降は行われていない。粟島のジャガイモは、甘くて美味しいと好評であり、秋に捕れる磯ダコを使った「イモダコ」も絶品と評判が高い。

【観光】

粟島の観光シーズンは6月から8月にかけての夏期であり、海水浴や釣りを目的とした観光客が多く訪れている。島民の多くは、漁家民宿であり、観光収入によって生計の多くを支えているといえる。島内で行える観光活動には、釣りや海水浴の他に、トレッキングや観光船、大謀網漁見学、乗馬体験等がある。また、天然記念物のオオミズナギドリ営巣地且つ渡り鳥の中継地であることから、バーウォッチングとしても知られている。

【地域資源の概要】

●自然資源

- ・ 一年を通して水産資源に恵まれる。海藻も豊富である。
- ・ 春には野菜に困らない程の山菜が山に自生している。
- ・ 天然記念物のオオミズナギドリとその営巣地の存在。

●文化的資源

- ・ 島の中で培われてきた食文化（「ワッパ煮」、「芋たこ」、「じばさとろろ」、「つる藻の油炒め」、「鮑の酒蒸し」、「芽かぶのからし酢味噌」、「貽貝の竜田揚げ」等とそれに関する作業や知恵・技術）。
- ・ 獅子舞、神楽、民謡等の伝統文化（「釜谷獅子舞」「内浦神楽」「さっこい三下がり」など）。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

島の文化の喪失の懸念

粟島は明治時代に3度の大火にみまわれ、古くからの文献・資料が消失してしまっている。自然環境と人々の生業との相互の関わりによって生まれ継承されてきた粟島独自の文化は、かつては青年会や婦人会などの島民同士の交流や、年間行事によって継承されてきたが、現在はそうした継承の場が失われており、多くの文化や知恵は年配者のみを知るものとなっている。少子高齢化の進行も伴い、伝統文化や生活文化は消失の危険に直面している。

粟島では平成27年度4月から島の文化を保存することを目的として、島の自然環境と人々の生業との相互の関わりを記録しフェノロジーカレンダーとしてまとめている。

地域資源の価値認識

前述のように栗島には豊かな自然資源や独自の文化的資源が存在しているが、島民がその価値を認識していないものが多くある。島民自身が栗島の資源の価値に気づき後世に継承していく意識を持つことが必要である。

文化継承の仕組みの構築

前述のように栗島ならではの生活文化、伝統文化は継承の場を失っている。エコツーリズムのように地域資源を保全・活用することによって継承していく仕組みを構築することも求められている。

以上を背景として、栗島の自然資源や生活文化資源の価値を顕在化させ住民意識を醸成すること、さらにエコツーリズム創造のためのアドバイスを頂きたい申請をした。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日	時	平成 28 年 3 月 4 日（金）～平成 28 年 3 月 6 日（日）
場	所	新潟県栗島浦村
アドバイザー		北海道大学 国際広報メディア観光学高等研究センター 特任教授 真板 昭夫氏
参加者		栗島浦村村長、栗島浦村役場職員、栗島観光協会、栗島浦村文化遺産保全・活用実行委員会会長、栗島浦村教育委員会、栗島浦村保育園（、栗島浦村小中学校教員、他島民、合計 23 名
スケジュール・方法		<p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観光協会と役場訪問（観光協会職員、及び村長、参与との顔合わせ） ・栗島浦村文化遺産保全・活用実行委員会 H27 年度報告会 視察（島内での平成 27 年度の文化遺産保存と継承の取組みについて） <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・島内視察（内浦、釜谷地区視察） ・講演（「地域の宝探し」について。講演タイトル「『栗島浦村からの国おこし』地域の自慢を見つけることから始める『宝探し』」） ・直売所・加工施設視察（島の物産について視察、アドバイス） <p>【3 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出島

(3) アドバイスの内容（議事録）

1) 講演会

- ・日本の町村の数は明治以前には 71,324（うち村の数は 60,000）あったが、現在は 1,718（うち村の数は 183）と大幅な減少となっている。この減少とともに各地域の文化も消失されてきている。今でも残っている村々に残る文化は、日本の「母文化」とも言われる。
- ・栗島浦村は、村であり続けた数少ない貴重な村のひとつである。
- ・観光とは、「国の光りを観る」ことであり、「光」とはその地域に住む人々が「最も自慢するもの」「他者に誇れるもの」であり、外部の価値観に合わせるものではない。自慢すべき「光」の多いところほど、観光での発展は持続化し、結果として観光客は増加していく。

- ・ こうした仕組みを用いた観光をエコツーリズムという。
- ・ エコツーリズムには「資源の保全」、「資源を活かした質の高い観光の提供」、「地域の振興・活性化」という3つの側面を持つ。
- ・ 地域の「風土」とは、「風の人」と「土の人」によって生み出されていく。つまり、地域外の人たち（風の人）との交流によって情報が運ばれ、それを地域の人（土の人）が受け取り、地域の自然・歴史等の文脈に合った新たな文化を生み出し「風土」がつくられる。
- ・ 地域には、「自然」、「生活環境」、「歴史・文化」、「産業」、「名人」という5つの「宝」がある。
- ・ この「宝」を探し出すためには、「地域生活の側から自然をみる」、「人と自然との相互関係について考察する」、「人間の営みにより維持されてきた自然や文化資源について評価する」という3つの側面が強調される必要がある。
- ・ 宝探しによる地域活性化に重要なことは、外部の人間が行うのではなく地域の人たちが行うことである。
- ・ 宝探しの各地の事例について紹介する。

(岩手県二戸市の事例、徳島県美郷村の事例、沖縄県南大東島の事例、滋賀県高島市の事例)

- ・ 宝探しを地域づくりに繋げるためには、すぐに出来るわけではなく、5つの段階がある。「宝を探す」段階、「宝を磨く」段階、「宝を誇る」段階、「宝を伝える」段階、「宝を活かす」段階。
- ・ 「宝探し」の意義とは、日常的な資源の価値の再発見と価値付けであり、それらを住民の人たち同士で共有し合う作業にある。こうした取組みが地域活性化の切り札として生かすことが出来る。
- ・ 「地域の宝探し」と「ブランド形成（宝興し）」をおこない、エコツーリズムという産業の枠組みをもちいることによって、地域の人々の発展のエネルギーとし武器としていくことが出来る。
- ・ フェノロジーカレンダーについて簡単に説明する。フェノロジーカレンダーとは、各地域の生活暦のことである。地域では、人々と自然との関わりによって暦が築かれている。自然の指標によって季節を感じとり活動をしている。1月～12月というのは後付されただけのものである。
- ・ フェノロジーカレンダーでは、いつ「宝」に出会えるのかという、地域の宝の旬が把握できる。
- ・ 旬の重なる宝の組み合わせにより、エコツアープログラムも作り出すことが出来る。
- ・ 地域の資源のマッチングビジネスも展開している（雑穀のブランド化、山菜と京都の料亭とのマッチング、ヤマブドウ酢の開発等）。
- ・ マッチングビジネスで大切な意識として、生産文化圏と消費文化圏での価値が異なるということ。例えば山菜の例。二戸市（生産文化圏）では大きなもの程価値が高いが、京都（消費文化圏）では、小さく上品なサイズが好まれる。
- ・ 地域の宝を地域の人たちが誇りに思い、自慢、発信していくことが重要である。

2) その他

- ・ 地域おこしをする際には、次世代つまり子供達に力を入れていくべきである。
- ・ 粟島でのエコツアーの可能性は大いにある。
- ・ 粟島だからこその資源を見出し、いかに売り出していくかが問題である。
- ・ 粟島を島の人たちの言葉で紹介する冊子やフェノロジーカレンダーの作成もすると良い。
- ・ 粟島で聞き書きをする場合は、中学生にさせることが良いのではないか。



講演会の様子



加工施設の視察



講演会後のワークショップの様子

「粟島浦村からの国おこし」
 地域の自慢を見つけることから始める「宝探し」
 主催：粟島観光協会

日時：平成28年3月5日(土) 13:30 ~ 16:00
 会場：公民館

近年、日本では各地域の人と自然の関わりから生まれた暮らしの知恵や伝統等、様々な生活文化や、地域固有の資源として保全・活用し、地域活性化につながる取組が行われています。
 粟島の独自の生活や伝統文化は、粟島の地理的条件や自然環境に対応した島民の皆様の知恵や工夫により生まれ継承されてきました。これらは貴重な文化遺産であるとともに、観光客にとっては魅力的な資源となります。
 今回は、日本や世界各地で各地域の人々と一緒になって、地域資源の掘出し、保全・活用を通じた地域活性化の取組を20年以上にわたり実施してきた、真板昭夫先生をお招きし、地域資源の発掘や活用の方法、各地での取組等をお話いただきます。

プログラム 13:30 ~ 16:00

■ 開会のあいさつ

(1) 「粟島浦村からの国おこし」
 地域の自慢を見つけることから始める「宝探し」

真板昭夫先生の経歴： 真板 昭夫 先生
 東京農業大学農学卒業、財)政策科学研究所に環境政策及び地域政策を担当。その後財)自然環境研究センターにて野生動物植物のワイルドライフマネージメント研究、1991年よりエコツーリズムの研究を開始。1998年日本エコツーリズム協会設立、エコツーリズムによる日本各地の地域づくりのフィールドワーク研究。海外では、アジア、ガラパゴスにてエコツーリズムのフィールドワーク研究。2001年東京大学農学部博士号を取得。同年、京都経済芸術大学にて観光デザイン学科教授及び研究センター長、ポレキキーズ「ふしぎな森のふしぎ先生」を担当。アジア太平洋地域のほか、日本各地の自然・歴史・文化資源を柱としたエコツーリズムに関する調査・研究を進めている。

講演会の広告

(4) アドバイザーの派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- 実際の取組が生まれた。
 - ・ 粟島浦村の資源がエコツーリズムに活用できるという認識は持っていたが、実際の活動には移されていなかった、または継続されていない。今回を機に、実際の取組が動き始め、それに牽引され島民の意識にも変化が生じている（いい意味でのプレッシャーが加わったともいえる）。
- 粟島を誇りに思うきっかけとなった。
 - ・ 粟島浦村が「村」であり続けたことの価値を知ることが出来た。
 - ・ 「村」であり続けたからこそ、島の個性が残っており、それが島の自慢と島民の誇りに繋がることを理解した。
- 地域資源について理解が深まった。
 - ・ 日常の暮らし、島民の知恵・工夫・技に「宝」があることを理解した。
 - ・ 生産文化の地域と消費文化の地域で資源に対する価値観が異なることを理解した。
- エコツーリズムに対する意識が高まった。

- ・ エコツーリズムとは何かということについて理解が深まった。
- ・ 自然環境だけではなく、島の暮らし、文化もエコツーリズムの資源になることを理解した。

2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- 島の資源活用についての協議の場が増加することが期待される。
- 過去にもエコツーリズムを試みた経緯があるが、改めて取り組みを始める機会となった。

3) 今後の取り組み

- 島でのエコツアーの実施
 - ・ 島民が実施したいと考えていたエコツアープログラムが実現に向けて進められるようになった。今年度中に全国の小中学生向けのエコツアーの実施が検討段階に入っている。
- 島の子供達による文化の継承
 - ・ 粟島浦村では、粟島浦村文化遺産保全・実行委員会を発足し、「文化遺産を活かした粟島への誇り醸成プロジェクト」（平成 27 年度「文化遺産を活かした地域活性化事業」（文化庁事業））を実施してきており、平成 27 年度は食文化を中心とした島の生活文化の記録を行ってきた。来年度は（採択の有無は未定だが）、島の年配者への聞き書きを実施する予定を立てている。今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣事業を機に、子供達を対象とした取組や、文化継承の場の創造に対する村内での理解が深まり、来年度予定している聞き書きでは、子供達が聞き手となって実施していくことが検討されている。
- 郷土料理の継承
 - ・ 前述のように、平成 27 年度には粟島浦村の食文化の記録を進めてきた。また、村の中でも「郷土料理を作ってみる会」が発足された。今後の食文化の記録の継続が期待され、「郷土料理を作ってみる会」の今後の活動展開のサポートも期待される。

(5) 今後の取り組み推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

- ・ 取組体制について島民が主体者となる必要があることを理解した。
- ・ 特に他地域の事例の紹介を頂いたことによって、実感が湧き理解が深まった。
- ・ 地域の子供達への愛は、他の価値観では左右されない貴重な地域の宝であること（南大東村の砂浜の事例等から説明）への理解が深まった。
- ・ 地域の生業がその地域の個性を生み出しているということへの理解が深まり（南大東村のサトウキビ生産と生活の暦の事例）、粟島浦村でも当てはめて考えることが出来る。
- ・ 一方で、二戸市の雑穀の事例等の紹介から、地域内と外との価値観の違いにより、地域内では価値が見出されていないものも、外に向けては高い価値となるということへの理解が深まった。
- ・ 山菜の例等から、生産地と消費地との価値観の違いがあることを理解し、今後商品やプログラム等をつくる際の参考になった。

2) その他感想

- ・ 村の宝の無限の可能性について覚醒された感がある（島民コメント）

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

真板 昭夫氏 (北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 特任教授)

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

- ・ 島の食文化の記録継承への取組
- ・ 伝統民謡の継承を目的とした島民合唱団が結成されている
- ・ エコツアーの構想はあるが実施まで至っていない。

②課題

- ・ 島の中で中心となり活動可能な人材を育成することと推進組織の体制構築が求められる。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

里海のアカモク、イソノリ、などの多様な海藻群落、アメフラシを始めとする磯海タッチング可能な海浜生物、地殻変動によって出来た岩石が海岸風景とその岩場でのオオミズナギドリの繁殖地

②上記地域資源に魅力を感じた理由

粟島は周辺が浅い海浜の地形となっていて多様な海浜生物が豊富で、子供達が身近に観察できる環境教育的な環境となっており、自然体験プログラムにはきわめて適した場所と言える。また地殻変動によって出来た岩石群が海岸風景を作っており、その島の風景を船でガイド付きツアー体験の可能性も考えられる。またその岩場にはオオミズナギドリの繁殖地があって県内ではここしか体験できない貴重な自然観察ツアーの可能性を秘めている。さらに里海に群生するアカモクを始めとする海草類はその採集や地場産の郷土色の体験も可能で、多種多様なエコツーリズムプログラムの考案が出来る可能性を秘めている。

3) アドバイス（講義等）の概要

粟島浦村で宝探しに関する講演会を実施した。議事録は、(3)に記載の通り。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

エコツーリズム推進全体構想への取組予定は現在のところない。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

- ・ 粟島には「村」として存続してきただけの個性が強く残っている。その個性を島民の手で磨いていきましょう。
- ・ エコツーリズムを実施するための可能性は大いにある。まずは、島民が主体的に取り組み始めることが必要です。